

今週の本棚

中村 達也 評

人間開発報告書 2010—国家の真の豊かさ

国連開発計画(阪急コミュニケーションズ・5040円)

二〇〇九年九月、ソルボンヌ大学の大講堂で、パスカルとデカルトの像を背に演壇に立ったサルコジ仏大統領は、今やGDP(国内総生産)に代わる人間社会の発展指標が不可欠だと、自信たっぷりのスピーチを繰り広げた。実は、このスピーチの元になっていたのが、著名な経済学者グループが作成したある報告書であった。そのグループの中の一人に、インド出身のノーベル賞受賞者、A・センがいた。

こうした指標作りの試みは、これが初めてというわけではない。すで

で、経済次元(一人当たりGDP)だけでなく、健康(平均余命)、教育(識字率、就学率)の状況を組み込んだ暫定的な指標として考察されたのが、人間開発指数(HDI)であり、以後、『人間開発報告書』として毎年発表されてきた。その二〇一〇年版の邦訳(八月刊)が、本書である。

バランスと格差で社会の姿を見直す

一九九〇年に、パキスタンの経済学者M・ハックが、国連開発計画部に働きかけて、GDPだけではない、より多面的な指標づくりを提案して

いた。そのときハックをサポートしたのが、他ならぬセンであった。先進国の経済学者であれば、恐らくはGDPやその成長率を軸にした指標を提案したかもしれないが、ハックの脳裏には、先進諸国とはおおよそ異なる祖国の悲惨な現状があった。そ

なみに、この方式で導き出されたHDIの世界ランキングで、日本は第一位。上位に位置するのが、ノルウェー、スウェーデンなどの北欧、オランダ、ドイツなど大陸ヨーロッパ、そしてアメリカ。

第二は、これまでは三分野それぞれの平均値を元に指数化されていて、その国の格差の状態が反映されていなかった。グローバル化が進む中で、世界中で格差が拡がり始めていることを考えれば、これでは不十分。そこで今回は、その国の格差の度合いに応じて、HDIを割り引く方式が採用された。その結果、例えばアメリカは、HDIでは第四位だが調整済みHDIでは第一二位へと転落(残念ながら、日本については、適合するデータの不足から、調整済みHDIは算出されていない)。その他、男女間の格差を示すジェンダ

ー不平等指数では、最も格差の小さい第一位がオランダ、日本は第二位、アメリカは意外にも第三七位、等々、興味深いデータが満載。

この二〇年間を総括して、『報告書』は人間開発をどう再定義している。「人々が長寿で、健康で、創造的な人生を送る自由、そのほか、意義ある目標を追求する自由」(さらには、すべての人類の共有財産である地球のうえで、平等に、そして持続可能な開発のあり方を形づくるプロセスに積極的に関わる自由を拡大することである。人々は個人としても集団としても、人間開発の受益者であると同時に、推進役でもある)と。もしそうならば、Human Developmentを「人間開発」と訳すのは、政策の対象・受益者としての側面に傾いて、プロセスに関わる主体的な推進役としてのニュアンスに欠けてしまう。「人間開発」よりは「人間発展」の方が本来の趣旨にかなうように思うのだが、どうであろうか。